

真字『正法眼蔵』伝承史の一側面

特に『通幻喪記』の記述に注目して

池 上 光 洋

一 問題の所在

道元の主著である仮字『正法眼蔵』と比較した場合、真字『正法眼蔵』(または『正法眼蔵三百則』あるいは『三百則』とも略称)ははやくに歴史の表舞台から姿を消すが、再び世の注目を集めるようになるのは、江戸時代の宗学者・面山瑞方(一六八三―一七六九)の指摘による。面山は、天桂伝尊(一六四八―一七三五)の『正法眼蔵弁解』に反駁する書を、讀われて著した。それが『正法眼蔵關邪訣』である。その中に次のような文がある。

次に嘉禎改元乙未冬至の日を以て、古徳の機縁三百則を編集して、分つて六巻と為す。自ら題して正法眼蔵と曰い、序を巻首に為る。余、驅鳥の時、始めて之を受業本師に聞く。自の後、行脚して相州岡崎の紫雲寺に到る。主人・天年老宿、親ら其の本を出し示す。此れは是れ、文明辛丑二月五日、瀧州脛長の法幢寺に在つて写す所の

古冊なり。余、素聞に慳することを喜んで、再び写して秘す。通幻喪記に謂う所の三百則・通幻和尚親筆と云うもの、蓋し此を写すならん。(原漢文)

嘉禎元年(一二三三)、道元は古徳の機縁・三百則を編集して六巻となし、自らその書に『正法眼蔵』と題を付した。面山は沙弥の時代にそのことを受業師より聞いたという。そして、後の行脚中に、神奈川県紫雲寺住持より、文明三年(一四七一)岐阜県法幢寺において書写された『三百則』の古写本を示され、面山は感激しつつそれを写し、秘蔵したという。それが由緒正しいものである証として面山は『通幻喪記』をあげ、そこに載せる「三百則・通幻和尚親筆」こそ、道元の真字『正法眼蔵』を写したものであろう、とするのである。面山自筆の筆写本も、その元となった法幢寺本も、残念ながら現存しないが、私は論証として引く『通幻喪記』に注目したのである。

『通幻喪記』は、峨山韶碩の法嗣・通幻寂靈が、明德二年

(一三九一)、福井県龍泉寺にて病に臥すところから記述がはじまり、仏事次第、その後の遺品分配先等が記述されているものである。その遺品分配先の中に、面山の引く一文が出てくる。そこには「聖興寺へ寄付、若干」と題して五品目が列挙され、その冒頭に次の様な記述がなされているのである。

一、三百則 通幻和尚親筆 三冊

寄贈先の福井県聖興寺は現在廃寺となり、通幻自筆本も今に伝わらないが、この『通幻喪記』の記載は、『三百則』伝承史上においても、曹洞宗史上においても重要な記述である。

現在、通幻親筆本の『三百則』も、その筆写本も、また、その存在を直接的に証明する資料も、『通幻喪記』の記述以外存在しない。そこで、もし、通幻の語を記録した『通幻禪師語録』(以下、『通幻録』と表記)の中に、『三百則』使用の痕跡が認められれば、通幻親筆本存在の新たな傍証となるであろうし、通幻及び通幻門下で、『三百則』が共通のテキストとして使用されていた証ともなる。またそれは、室町時代における曹洞宗門の門参発生と流行を解明する一つの手懸かりともなるであろう。

以上のような理由から本稿では、『通幻録』に引かれる古則と真字『正法眼蔵』とを対照して、そこに有意な関係があるかどうかを検討し、その結果を考察せんとするものである。

二 通幻寂靈と『通幻録』について

通幻寂靈は、元亨二年(一三三二)、豊後(一説には京都)に生まれた、俗姓は藤原氏ともいわれる。一七歳で出家し、暦応三年(一三四〇)加賀大乘寺に瑩山紹瑾の高弟・明峰素哲(一二七七―一三五〇)を尊ね、文和元年(一三五二)能登總持寺の峨山韶碩(一二七六―一三六六)に参じ法を嗣ぐ。總持寺に三度昇住するほか、丹波永沢寺、越前龍泉寺を開創する。明徳二年(一三九一)龍泉寺にて示寂、法臘五二、世寿七〇歳であった。

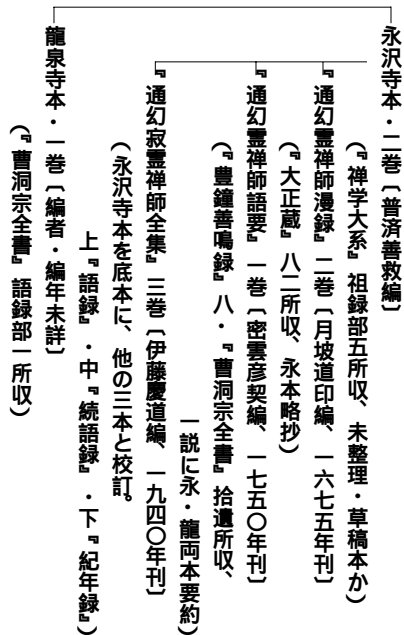
生涯の業績は、總持寺輪住制の確立と、「通幻十哲」と呼ばれる多くの優れた弟子を輩出し、後の曹洞宗最大の門派となる礎を築いたことであろう。

また、室町時代の曹洞宗変容の分岐点に位置するのも通幻の特徴といえよう。圭室諦成氏や広瀬良弘氏によって指摘される通り、道元の時代には上堂・小参等を記録した語録の内容が、ほぼ坐禅に関するものに限られていたのに対し、通幻の頃には坐禅と葬祭関係の法語が半々の比率となり、以後逆転していく転換点に、通幻は位置している。別な言い方をすれば、求道者中心の原始曹洞宗僧団が、広く一般庶民に開かれた教団へと変貌を遂げていく中間点に、通幻は存在しているといえよう。思想的な面においても、室町期の曹洞宗

を席巻する公案禅受容の祖^①として、夜参発生の伝説が通幻に仮託^②されるようになる。活埋^{かつまいまう}敷や文字点検、同門沙汰などの公案禅を中心とした機鋒峻烈な接化法が、通幻の逸話として語られていくのである。

次に、本稿で扱うテキストについて検討していきたい。

『通幻録』と称されるものには、現在、永沢寺本は、龍泉寺本に比較した場合やや未整理なもので、永沢寺本は、龍泉寺本に比較したものは再治本ではないか、といわれている。しかし、江戸時代成立の『通幻靈禪師漫録』や『通幻靈禪師語要』は永沢寺本をもとに編集がなされ、昭和初期に通幻関係の資料を網羅した伊藤慶道氏の『通幻寂靈禪師全集』も永沢寺本を底本として使用している。未整理ながら永沢寺本が重視される理由は、それが通幻の高弟・普濟善救の編にかかっているのに対し、龍泉寺本が編者・編年共未詳とされる点だが、両者の扱いの違いとしてあらわれているのだろう。右に挙げた『通幻録』諸本の関係を図示すると次のようになる。



最後に、『通幻録』の研究史を概観したい。

通幻派は、曹洞宗最大の門派であるが、その祖の語録である『通幻録』には、注釈書類は存在しない。『通幻録』研究の嚆矢は、昭和十五年、伊藤慶道氏によってなされた『通幻禪師全集』三巻（永沢寺 兵庫県）の編纂であろう。その後、昭和五二年の中嶋仁道氏による『南北朝時代の一傑僧 通幻和尚の研究』（山喜房仏書林）まで空白期間があり、また、二年後の昭和五四年に同じく中嶋氏によって著された『禅籍 看読の要領』（山喜房仏書林）以降も、『通幻録』を主題として取り上げた研究は見当たらない。つまり、現時点での先行研

究は、右の三点といふことになる。

伊藤氏の『全集』は、先に記した通り、永沢寺本を底本に、龍泉寺本と漫録・語要を対校した上巻の語録、語録に漏れた遺文や機縁のほか、弟子の通幻に対する法語類や、通幻に関する伝記類を集めた中巻の統語録、通幻とその弟子(通幻十哲)の行業を編年体で記録した下巻の紀年録の三巻からなる全集で、通幻研究の基礎的資料を提供したものである。中嶋氏の『通幻和尚の研究』は、前半が通幻伝の研究で、後半に伊藤氏の『全集』を底本とした書き下し文に、通し番号を付した基礎的なもので、その成果は後の『禅籍看読の要領』に引き継がれる。『禅籍看読の要領』は、その書き下し文をもとに再編されたもので、それに語注・現代語訳が付され、語句の典拠も指摘されている。これが現時点での『通幻録』研究の到達点といえるが、その例言に明らかのように、同書は専門の研究書としてではなく、参禅者の参学の指針となるために編まれたものである点、注意を要しよう。

三 『通幻録』引用古則の検討

では、『通幻録』の引用古則の検討に入っていきたいと思う。まず、使用するテキストであるが、諸本対校の伊藤本『通幻録』が一見相応しく思われるのだが、凡例中に、

(一) 永。龍二本の到底対校し得ざるものは、一一之を

指定して別別に付加したるものなり。(三) 語録の編纂は。出来得る限り。永。龍二本の原型に保存に注意せるも。歴史的²⁴⁾研究の結果。修正を要すべきもの少からず。即ち支那宋初以来の禅門巨匠の語録の編纂法に則り。私意を以て聊か改変するところ無きにあらず。(凡例二頁)

と、一、永沢寺本と龍泉寺本は、到底一本に収まりきらない箇所が存在すること、二、永・龍二本は、宋代以降の語録編纂法と比較した場合、修正を要する箇所が多数存在するため、伊藤本では「私意を以て聊か改変」がなされていることから、今回は伊藤本の利用は見合わせることにした。また、龍泉寺本も整理がなされているとはいふものの、編者・編年共に未詳のため、参考程度の参照にとどめ、今回は、古形を残すと思われる永沢寺本をテキストとして使用することにした(尚龍泉寺本の該当箇所は注に挙げておいた)。真字『正法眼蔵』に関して、河村孝道氏校訂の『真字・仮字』『正法眼蔵』成立・編輯・伝写の様相(教行社一九九二年)所収本を用いた。

さて、今回検討する範囲であるが、語録中で古則として原形を留めるものを調査し、禅語の片言隻句は対象外とした。では、具体的に検討に入っていく。

『通幻録』中、古則の原型を留めるものは全部で二九則であるが、このうちの『三百則』に関わるものは、以下の八則で

ある。

洞山仏麻三斤

上堂。想澄成国土。知覺乃衆生。六塵昏擾。世界崢嶸。眼中之物。处处分身。物中之眼。处处齋平。有縁朋友是天地。無用双着方兄弟。拳僧問洞山。如何是仏。山曰麻三斤。洞山答処。恰似指槐樹黒栢樹。今朝有人。問山僧如何是仏。只对他道。仏是西天老比丘。若又會不得更道。殿裏底是木像。下座。(四頁一三二—一六行目)

この則は、『三百則』中巻の七二則にあり、『三百則』は「麻三斤」の後に「僧有悟、便禮拜」とある。書き出しも「洞山有僧問」と違ひはあるものの、短いものであるため、『三百則』をその典拠としてあげられなくもない。

洞山有僧問、如何是仏、師曰、麻三斤、僧有悟、便禮拜、(一四〇頁)

しかし、『通幻録』の「麻三斤」の後に見える通幻の語(恰似指槐樹黒栢樹)に似た表現が、『碧巖録』巻二・十二則の本則にあることから、出典は『碧巖録』といふことになる。

拳。僧問洞山如何是仏。(鉄蒺藜。天下衲僧跳不出。)山

云麻怱三斤。(灼然。破草鞋。指槐樹黒栢樹為秤鎚。)

道怱年頭仏法

歲朝上堂。新年与旧年。百福一清明。万物亨嘉慶。兆民

真字『正法眼蔵』伝承史の一側面(池上)

沐太平。拳僧問古徳。新年還有仏法也否。徳曰無。僧曰。年年是好年。日日是好日。為甚還無。徳曰。張公喫酒李公醉。可謂一条主丈子兩入扶。若有人問總持如何是新年頭仏法。只对他曰。新婦騎驢阿姑牽。且道与古人相去多少。卓一主丈下座。(八頁七—一〇行目)

この則は『三百則』上巻の三九則に相当する。

杭州龍冊寺道怱禪師 嗣雪峰 因僧問、新年頭還有仏法也無、師曰、有、僧曰、如何是新年頭仏法、師曰、元正啓祚、万物咸新、僧曰、謝和尚答話、師曰、老僧今日失利、又僧問明教、新年頭還有仏法也無、教曰、無、僧云、年年是好年、日日是好日、為什麼却無、教曰、張翁喫酒、李翁醉、僧云、老老大大、龍頭蛇尾、師曰、老僧今日失利、(九六頁)

『三百則』によつてみると、『通幻録』の古徳は「明教」で、三九則の後半部分に相当することがわかる。『三百則』とは、細かな語句の相異が見られるが、『永平伝録』巻一・上堂三三等のその他の出典群にも同様の傾向が見られるので、何が出典であるか確定することは出来ない。消極的な理由によるが、『三百則』も出典候補の一つとすることは出来る。因みに、通幻の答えの「新婦騎驢阿姑牽」も語録中に散見する言葉であるが、「年頭仏法」と関連付けられたものは未検である。

文殊前三後三

結夏上堂。劫前機。肘後符。〈中略〉拳文殊問無着。近離甚処。著曰。南方。殊曰。南方仏法如何住持。着曰。末法比丘少奉戒律。殊曰。多少衆。着曰。或三百。或五百。師曰。一尺水一丈波。謝郎船上唱山歌。又無着問文殊。此間仏法如何住持。殊曰。凡聖同居。龍蛇混雜。着曰。多少衆。殊曰。前三三。後三三。師曰。拈起無柄木杓。舀出銅汁饒酸。大家且道。畢竟如何。四五千条花柳巷。一三万座管絃樓。(九頁二一—一六行目)

『三百則』中・二七則

文殊問無着。近離甚処。著曰。南方。殊曰。南方仏法如何住持。著曰。末法比丘少奉戒律。殊曰。多少衆。著曰。或三百。或五百。著問文殊。此間仏法如何住持。殊曰。凡聖同居。龍蛇混雜。著曰。多少衆。殊曰。前三三。後三三。(一二七行)

この則も『三百則』とほぼ一致するものの、『碧巖録』等多数の典籍に存在するので、出典を確定することは出来ない。『三百則』もその候補の一つではある。

雲門還飯錢來

解夏上堂。不求諸聖。不重己靈。〈中略〉師曰。今朝解夏。大衆參堂。進曰。一句截流。万機覆削。師曰。風吹不入。水洒不着。進曰。記得。僧問雲門。秋初夏末各走前程。

或有人問。未審對他道什麼。門曰。大衆退後。意旨如何。師曰。犀因翫月紋生角。象被雷驚華入牙。進曰。僧曰。過在什麼処。門曰。還我九十日飯錢來。還的當也無。師曰。行到水窮処。座看雲起時。進曰。上來一。祇对。与他古人相去多少。師曰。驢前馬後。進前退後。進曰。〈以下略〉(一〇頁一七行目、一一頁八行目)

『三百則』下・八則

雲門因僧問。秋初夏末。前程或有人問。未審對他道什麼。師曰。大衆退後。僧曰。過在什麼処。師曰。還我九十日飯錢來。(一一三頁)

この則是、ままと違い、弟子の質問中に引かれる古則である。『宏智録』等に見え『三百則』にも対応するが、どれを出典とするかは決め手が無い。

三聖推出一僧

〈前略〉卓主丈一下曰。時節現前。山川吐氣。風流也。風流。意気更意気。個中莫有皮下有血底漢麼。試出來相見。僧出衆問。樓閣千家月。江湖万里秋。蘆華無異色。白鳥宿汀洲。学人上來請師指示。師曰。雲蘿秀處青陰合。巖樹高低翠鎖深。進曰。不動金輪万德全。師曰。又是草漢。進曰。宝寿開堂。三聖推出一僧意旨如何。師曰。鎮州蘆。蘆大。廬陵米。米高。進曰。宝寿打其僧。三聖曰。若恁麼為人。有瞎却鎮州一城人眼在是也無。師曰。刀斧斫不開。

黒風吹不入。進曰。上來指示外。別有通霄路麼。師曰。直透萬重關。忝居青霄外。進曰。直得針芥相投。師曰。石人行処不同功。(一四頁一七行目—一五頁四行目) へ以下

右は永沢寺開堂に因んだもので、と同じく、弟子の質問中に出るもので、祝國開堂によく引かれる則である。『三百則』の他、『宏智録』や『明覚録』、『五灯会元』等に出る。次に見るように、『通幻録』では、非但瞎却這僧眼、が省かれており、『三百則』よりは『宏智録』の方が近い(但し、『宏智録』は宝寿が保寿に作る)。

『三百則』上・四〇則

鎮州宝寿沼和尚 嗣臨濟 開堂、三聖推出一僧、師便打、聖曰、你恁麼為人、非但瞎却這僧眼、瞎却鎮州一城人眼去在、師擲下拄杖、便歸方丈。(九七頁)

『宏智録』卷一

保寿開堂三聖推出一僧。保寿便打。三聖云。恁麼為人。瞎却鎮州一城人眼去在。保寿便下座。⁽²⁴⁾
三聖出不出緣

へよりへ 迺曰。妙靈廓通弥天句。已彰無功妙用。匠地無紋彩。金鷄夜半飛。玉兔午日眠。且道須弥那畔。是什麼人担荷。天水混時秋一色。衆星拱処紫微高。拈三聖道。我逢人則便出。出則不為人。興化曰。我逢人則不出。出

真字『正法眼藏』伝承史の一側面(池上)

則為人。山僧拈此公案來。教尽大地人。借他鼻孔出氣去。諸人作麼生。拈起弘子弘一弘曰。龍吟雲起。虎嘯風生。下座。⁽²⁵⁾(一五頁四—七行目)

この則は の続きで、こちらは通幻が引いてくるもので、『三百則』上・九二則の他、『宏智録』や『如浄録』、『五灯会元』等に出る。『三百則』で「即」とあるものが、『通幻録』では全て「則」になっているなどの違いがあるが、『如浄録』は文字がほとんど一致する上、通幻の一転語(龍吟雲起。虎嘯風生)も見られることから、出典は『如浄録』であろう。

『三百則』上・九二則

鎮州三聖院慧然禪師 嗣臨濟 道、我逢人即出、出即不為人、興化道、我逢人即不出、出則便為人。(一一三頁)

『如浄録』卷上

復拳 結座 三聖道。逢人則便出。出則不為人。興化道。我逢人則不出。出則便為人。此兩則公案驗尽衲僧。難為著眼。忽被我大檀越建康府主等閑覷。破拳似清凉。可謂龍吟雲起。虎嘯風生。未免借尚書鼻孔。為叢林出氣。有箇口号拳似諸人。一拳首登龍虎榜。太平親到鳳凰池。全生全殺超言象。更透機先向上機。⁽²⁶⁾

趙州四大五蘊

端午上堂。今朝重午天中節。百草頭上祖意明。水從断筧絶。法從空処生。拳僧問趙州。如何是不壞底。州曰。四

大五蘊。僧曰。此是壊底。作麼生是不壊底。州曰。四大五蘊。拈曰。此僧皮下無血。趙州舌頭無骨。青原別有返魂術。重作為死馬医去。唵阿囉囉呬耶娑婆訶。下座。(一八頁二一—一五行目)

本則は、『三百則』下・八八則の他、『永平広録』卷二・上堂一四〇、『圓悟録』等に出る。これらは全ては、「不壊之性」を問う前に、その前提として「未有世界、早有此性、世界壊時、此性不壊」を載せるが、『通幻録』ではいきなり「如何是不壊底」と質問した形になっている。また、『三百則』等に見える「性」の字が、見られなくなるなど、同一の傾向がある。『三百則』も出典候補の一つといえよう。

『三百則』下卷・八八則

趙州因僧問、未有世界、早有此性、世界壊時、此性不壊、如何是不壊之性、師曰、四大五蘊、僧曰、此猶是壊底、如何是不壊之性、師曰、四大五蘊、(一七九頁)

趙州庭前柏樹

師上堂。祝聖了以弘子。指上下曰。月在天水在瓶。正位住其間。偏位周十方。更有一物遍界不蔵。知有底漢。出來商量。(中略)拳僧問趙州。如何是祖師西來意。州曰。庭前栢樹子。諸人若何荐取。須弥鉄圍。鶴長鳧短。現成説法。希有不思議。今日有人問新太平。如何是祖師西來意。对他曰。乞兒打破飯碗。卓拄丈下座。(二〇頁一

六行目—二頁九行目)

『三百則』中・一九則

趙州因僧問、如何是祖師西來意、師曰、庭前栢樹子、僧曰、和尚莫以境示人、師曰、吾不以境示人、僧曰、如何是祖師西來意、師曰、庭前栢樹子、(二二四頁)

この則は、龍泉寺祝國開堂の最後に出てくるもので、『三百則』の他、多書に引かれる。短いものなのでどの書物から引用されたかは不明である。消極的な理由によるが、『三百則』も出典群の一つといえよう。因みに通幻の一転語である「乞兒打破飯碗」は如浄の言葉で、『如浄録』に見える他、道元も如浄の語として『正法眼蔵』や『永平広録』に引くが、栢樹子の話との関連は見られない。

四、結論

以上、『通幻録』に引用される古則・二九則のうち、特に『三百則』に関連のある八則を例示して検討してきた。八則中、『五則』において、『三百則』からの引用の可能性を指摘出来たものの、どれも積極的な理由には乏しく、則全体からすると、六分の一以下の出現率である。よって、今回の作業からは『通幻録』と『三百則』の間に有意な関係があるとはいえず、現時点では通幻門下で『三百則』が共通のテキストとして使用されていた痕跡は見出し得なかったと

言わざるを得ない。また、今回の調査では引用典籍の傾向も見出すことは出来なかつた。語録中に散在する片言隻句を含め、『通幻録』全体の出典研究を今後の課題としたい。

最後に、『通幻喪記』の記述についてであるが、我々は面山の指摘以降、『三百則』という視点から無意識的に『通幻喪記』の記載を見てしまつが、そこに記される『三百則』通幻和尚親筆「三冊」という記述は、『喪記』の原著者、或いは、当時の通幻門下に於いては、『三百則』そのものよりも、『通幻和尚親筆』の方により高い価値が見出されていた、といえるのではなからうか。

注

- (1) その理由については、河村孝道氏の「真字『正法眼蔵』の研究(一)」「正法眼蔵成立史の研究」の一環として、「駒沢大学仏教学部研究紀要」三一(昭和四八年)一四四頁注。および「正法眼蔵の成立史的研究」(春秋社、昭和六二年)九八頁注¹参照。
- (2) 『永平正法眼蔵蒐書大成』二〇(大修館書店、昭和五二年)二七三頁^a。
- (3) 前注¹「紀要」一三七頁^a、『成立史』九二頁。
- (4) 『続曹洞宗全書』二・清規・講式(曹洞宗全書刊行会、昭和五一年)二九頁^a。
- (5) 『三百則』の冊数を、『正法眼蔵關邪訣』は六冊、『通幻喪記』は三冊とするが、『三百則』諸本中、六巻立ては成高寺本だけ

真字『正法眼蔵』(伝承史の一側面(池上))

で、他は全て三巻である。『關邪訣』の記述は、面山の見聞した『三百則』が全て、成高寺本系統に属していたためであるうか。前注¹『成立史』二六〇頁、同、真字・仮字『正法眼蔵』成立・編輯・伝写の様相(教行社、平成四年)二四二頁参照。

- (6) 栗山泰音『嶽山史論』(鴻盟社、明治四四年)一七四―一九一頁、山端昭道「北国道の要に」(『跳龍』三六二)大本山總持寺、昭和五三年九月/再録『通幻さま』永沢寺、昭和五四年(八六)九九頁、中嶋仁道『通幻和尚の研究』(山喜房仏書林、昭和五二年)一四二―一四八頁等参照。

- (7) 伊藤慶道氏は、『正法眼蔵』一(堂雪書院、昭和十五年)の「凡例」の中で、「延宝七年の永沢寺交割帳には、三百則三巻と見へて、当時同寺に一本を宝襲せることを伝へたり」と(三頁)とし、大久保道舟氏(『金沢文庫本『正法眼蔵』の書誌学的立場』、『日本仏教史学』三一)「日本仏教史学会、昭和一九八年」八四頁/再録『道元禅師伝の研究』(岩波書店、昭和二八年)四〇六頁)や水野弥穂子氏(『金沢文庫本正法眼蔵について』、『正法眼蔵』上・解説(岩波書店、昭和四五年)五八七頁)もそれに従うが、河村孝道氏は、永沢寺の「交割帳」には、『三百則』に関する記事は存在しないと、前三氏の説を否定する(前注¹「紀要」一四三頁、『成立史』九二頁)。

- (8) 前注¹『成立史』八七、九八頁参照。
- (9) 伊藤慶道『通幻禅師統語録』(永沢寺、昭和十五年)、前注⁶山端『通幻さま』・中嶋『通幻和尚の研究』、中嶋仁道『通幻禅師と撰丹境永沢寺』(兵庫県獄山会、平成五年)等参照。
- (10) 圭室諦成『葬式仏教』(大法輪閣、昭和三八年)一二九頁、

- 広瀬良弘『禅宗地方展開史の研究』(吉川弘文館 昭和六三年) 三三五頁参照。
- (11) 大久保道舟前注7および鏡島元隆「道元思想の展望」(『道元 禅師とその宗風』春秋社 平成六年 二八頁)等参照。
- (12) 石川力山「中世禅宗教団の展開と禅籍抄物資料」(『仏教の歴史の展開に見る諸形態』創文館 昭和五六年 四一三頁/再録『禅宗相伝資料の研究』上 法蔵館 平成十三年 六三頁)参照。また、飯塚大展氏によると、『通幻喪記』に載す典籍類には多数の五位関係のものが含まれ、峨山派の教学的部分を担ったものが「五位」の思想であったと推定(『峨山に擬せられる禅籍抄物について』「宗学研究紀要」一三〇)曹洞宗総合研究センター 平成十二年(一三六頁)される。道元の批判した五位思想が、通幻に見られる点も、その思想的特徴といえよう。
- (13) 「例言」の二に、「本書は、参禅道場において禅籍看読の指導を受けようとする各位、もしくは家庭での書齋で、これを独習しようとする各位のために、講本と入門書を兼ねる目的で公刊したものである」(序部一一頁)とある。
- (14) 『禅学大系』祖録部五(一喝社 大正一年)所収。尚、判読の便を考え、読点を付加した箇所があるが、一々指摘しなかつた。
- (15) 龍泉寺本：『曹洞宗全書』五・語録一(曹洞宗全書刊行会 昭和六年)八三頁a二二一八行目。
- (16) 『碧巖録索引』(禅文化研究所 平成三年)五四頁。
- (17) 前注15八二頁a二丁七行目。
- (18) 前注15八六頁a一七行目、b五行目。
- (19) 前注15八七頁b五行目、八八頁a三行目。
- (20) 前注15六七頁a二一八行目。
- (21) 石井修道編『宏智録』上・上堂二二四(名著普及会 昭和九年)四六頁。
- (22) 前注15六七頁b一一一行目。
- (23) 鏡島元隆「天童如浄禅師の研究」(春秋社 昭和五八年)一五三頁。
- (24) 前注15八六頁b一三行目、八七頁a一行目。
- (25) 前注15八八頁b七行目、六九頁a二行目。この則是、龍泉寺本ではその他、六六頁a二丁五行目、八三頁b一七行目の二箇所に見られる。
- (26) 研究発表の後、飯塚大展氏より、室町時代の禅籍は、古則等の引用が雑になり、鎌倉期のもののように厳密に出典を確定していくことは困難となる、との御指摘を受けた、記して感謝申し上げたい。